

## 研究論文

## 成人看護学実習前後の学生の変化に関する研究

— 「不安」「看護過程展開」「コンピテンシー」を中心に—

中澤 洋子・立石 和子・原谷 珠美・佐々木 聖子

(2011年12月22日受稿)

**抄録：** 効果的な臨地実習指導を検討することを目的として、新設看護系大学の3年生78名を対象に臨地実習（以下実習）における「不安」、「看護過程展開」および「コンピテンシー」の自己評価に基づくアンケート調査を行ったところ、学生は実習前よりも実習後に不安や実習中の記録物への負担を感じており、対象の理解が不足しているために看護計画の立案に困難さを感じていることが分かった。また、実習を通して、誠実さや批判的能力、言語的能力、リーダーシップ、自分とは異なる考えを理解し受容する力量、リーダーシップ、書き言葉によるコミュニケーションを獲得する必要があることに気づいていることが分かった。実習に携わる教員は、学生が新たな知識や学習の必要性に気づけるように関わる必要がある。

## I. はじめに

我が国の看護教育は1992年に看護師等人材確保の促進に関する法律が制定されて以来、養成所中心の教育から、急激に大学中心の教育へ変化した。2010年には、看護系大学は188校となり1990年初頭と比較し、約10倍以上となった<sup>1)</sup>。当大学においては2008年に看護学科が開設され、2010年に初めて成人看護学実習を行った。大学における看護系人材養成のあり方は、看護教育のコアとなる能力として看護実践能力が重視され<sup>1)</sup>、臨地実習は大きなウエイトを占めている<sup>2,3)</sup>。特に成人看護学実習は慢性期と急性期それぞれ3週間（3単位）計6週間（6単位）の実習で、臨地実習のなかでも学生が看護観を育むのに重要な役割がある。

そこで大学の成人看護学実習において学生がどのような不安や負担感をいだき合わせて臨地実習において、知識・技術・能力を身につけるのか調査することは、学生の特徴をふまえた成人看護学実習の指導方法を考える上で意味がある。

## II. 目的

看護大学生の成人看護学実習前後における不安・負担感、看護過程展開、コンピテンシーに関する自己評価の変化を調査し、学生への実習指導の在り方を考察する。

## III. 方法

## 1. 調査対象

A大学の看護学科3年次に在籍し、成人看護学実習を履修した78名。対象は2年次後期に基礎看護学実習を終了し、3年次後期に各論実習で成人看護学実習Ⅰ（慢性期）とⅡ（急性期）（以下成人実習）を経験している。

## 2. 調査方法

調査期間は2010年7月（成人実習前）および2010年10月から2011年2月まで（成人実習終了後）である。成人実習前と成人実習終了後に学生に対し集合調査を行なった。

## 3. 調査内容

実習前後に①不安・負担感、②看護過程展開、

## ③コンピテンシーに関する質問紙調査を行った。

コンピテンシーについては『日欧の高等教育と職業に関する研究』<sup>7)</sup>(略称CHEERS)で開発した調査項目およびコンピテンシー(知識・技術・能力)の項目を参考に一部変更したものをを用いた(表1)。

## ①不安・負担感

【非常に感じる：4点】【やや感じる：3点】【それほど感じない：2点】【感じない：1点】の4段階尺度を用いて、実習に対する心配・不安、対人関係、知識、看護技術、健康、記録物、実習施設について質問した。

## ②看護過程展開

実習目的・目標である「対象の理解」「対象の看護計画の立案」「対象の看護計画を援助の実施・評価」「保健医療福祉関連職種によるチームアプローチの理解」「学生としての役割・義務」について【援助がなく到達できると思う：5点】【指導によりできると思う：4点】【常に指導により

できると思う：3点】【常に指導を受けてもできないと思う：2点】の4段階尺度を用いて質問した。

## ③コンピテンシー

立石らが作製したコンピテンシーの項目<sup>5)</sup>は、知識(12項目)・技術(13項目)・能力(12項目)の37項目で(表1)「臨地実習前の現在のどの程度身につけていると思いますか」(獲得能力)・「看護師にとってどの程度必要と思いますか」(必要能力)について【全くない：1点……とても高い：5点】の5段階評価で質問した。

## 4. 分析方法

調査した項目に対して実習前・後で得点を単純集計し平均値および標準偏差値を表し、実習前と実習後で比較した。実習前後の比較検討にはt検定を行い、分析にはSPSS18.0を使用した。

## 5. 倫理的配慮

実習前・後に学生に対して、研究の目的、研究への参加は自由意思であること、成績とは関係な

表1 コンピテンシーの37項目

知識 (12項目)	技術 (13項目)	能力 (12項目)
1. 幅広い知識・教養	13. 問題解決の能力	26. 自発性・自主性
2. 学際的な知識や考え方	14. 分析能力	27. 融通性、適応性・適応能力
3. 特定の分野に関する理論的知識	15. 学習能力	28. 自分の意見をはっきりと主張すること
4. 特定の分野で必要な方法論や分析技法の知識	16. 自分の仕事を客観的に評価する能力	29. 集中力
5. 外国語の能力	17. 創造性	30. 誠実さ
6. コンピュータを扱うスキル	18. プレッシャーの下でも仕事ができる精神力	31. 物事を批判的に吟味・検討する能力
7. 仕事の立案、調整、組織化の能力	19. 綿密性・細部に目配りする能力	32. 話し言葉によるコミュニケーション能力
8. コスト感覚をもって物事に対処する能力	20. 時間を管理できる力量	33. 書き言葉によるコミュニケーション能力
9. 複雑な社会、調整、組織化の能力	21. 交渉能力・折衝能力	34. 他の考えを理解し、受容する力量
10. 規則を現実の場面で柔軟に運用する能力	22. 仕事への心構えや十分な体力	35. リーダーシップを発揮する力量
11. 情報やアイデアを収集し整理する能力	23. からだや手先を使う技能	36. 自分の責任で決定を下す力量
12. 法律の知識(倫理的な面を含む)	24. 独力で仕事ができる能力	37. これからの物事を予測できる能力
	25. チームの中での仕事を遂行する能力	

いことを文章および口頭で説明し、同意が得られた者のみに配布した。

## 6. 用語の定義

コンピテンシーとは「ある基準に対して効果的なあるいは優れた行動を引き起こす個人の中に潜む特性」(Spencer L. & Spencer S. 1993)である<sup>4-6)</sup>。ここでのある基準とは、実習において「…ができる」という保有能力ではなく、「…をした経験がある」「…する」という、行動に現れた発揮能力を指す。本研究ではコンピテンシーを「実習を効果的に遂行するために必要な知識・技術・能力で測定可能なものでありトレーニングや能力開発によって向上可能なもの」と定義する<sup>7)</sup>。

## IV. 結果

質問紙の回収率は、実習前75人 (96.1%)、実習後72人 (92.3%) であった。

### 1. 不安・負担感について (表2)

「実習に対し心配・不安はありますか」について実習前の平均値は1.2 (標準偏差値0.4、以下±0.4と表記する) であったが、実習後に3.4 (±0.7) と上昇していた ( $p<0.001$ )。また、「既習の活用

について心配・不安を感じていますか」は実習前2.9 (±0.7) が実習後3.2 (±0.9) で有意差はなかった。「実習中の記録物の負担を感じていますか」は実習前2.6 (±0.8) が実習後3.4 (±0.8) と実習後に有意な上昇がみられた ( $p<0.001$ )。看護技術と「指導者に対して援助を求める」を除く対人関係3項目は実習後に有意に低下していた。また、「臨床指導者との関わり」、「治療・処置的援助について」では弱い有意差 ( $p<0.05$ ) が見られた。「自己の健康管理についてどの程度不安・心配を感じていますか」「実習施設の通学に対する心配・不安を感じていますか」は実習後に低下していた。

### 2. 看護過程展開

看護過程展開の結果を表3に示す。対象の理解については「対象の発達段階と発達課題を理解できる」以外の項目が、実習後の平均値は3以下となり、有意に低下した ( $p<0.001$ )。また、看護計画の立案の4項目すべてにおいて実習後の平均値は3以下と低くなった ( $p<0.001$ )。援助の実施・評価では「対象が病気を受け入れ、生活しながら療養の援助ができる」が実習前4.5 (±0.9) 実習後4.4 (±0.6) 「対象の状況に応じて援助を評価・

表2 不安・負担感に関する結果

質問内容		実習前 (n=75)	実習後 (n=72)	t値	有意 確率
実習に対して	実習に対し、不安、心配	1.2 (0.4)	3.4 (0.7)	-24.841	0.0001
	看護過程について不安、心配	3.7 (0.5)	3.3 (0.7)	3.801	0.0001
対人関係	対象者との関わりに心配、不安	3.6 (0.5)	2.7 (0.9)	7.459	0.0001
	臨床指導者との関わりに心配、不安	3.3 (0.7)	3.0 (1.0)	2.030	0.044
	教員との関わりに心配、不安	3.5 (0.7)	2.7 (0.9)	6.261	0.0001
	指導者に対して援助を求める	3.1 (0.8)	3.0 (0.8)	.829	n. s.
知識	既習の活用について心配、不安	2.9 (0.7)	3.2 (0.9)	-1.873	n. s.
看護技術	日常生活援助技術について心配、不安	3.6 (0.5)	3.1 (0.8)	4.306	0.0001
	治療・処置的援助技術について心配、不安	3.5 (0.6)	3.3 (0.8)	2.190	0.030
健康	自己の健康についてどの程度心配、不安	3.7 (0.5)	2.3 (1.1)	10.016	0.0001
記録物	実習記録物の負担感	2.6 (0.8)	3.4 (0.8)	-6.013	0.0001
施設	実習施設の通学に対する心配・不安	3.6 (0.6)	3.2 (0.9)	3.636	0.0001

\* 平均値および ( ) 内は標準偏差値

\* t 検定 (両側)、n. s.=not significant

表3 看護過程展開の結果

質問内容		実習前 (n=75)	実習後 (n=72)	t値	有意 確率
対象の 理解	対象の発達課題と発達段階の理解	4.4(1.0)	3.2(1.1)	6.892	0.0001
	対象の健康状態の理解	4.5(0.9)	2.5(1.0)	12.370	0.0001
	対象の身体心理的・社会的特徴の理解	4.5(0.9)	2.7(1.1)	10.370	0.0001
	対象の健康障害の特徴を捉え方	4.2(0.9)	2.4(1.1)	10.946	0.0001
看護 計画の 立案	アセスメントから導いた看護問題の特定	4.6(0.9)	3.0(1.1)	9.492	0.0001
	関連図を作成し、全体像を捉え方	4.4(0.9)	2.2(1.1)	12.755	0.0001
	優先度を考えた看護問題をの設定	4.2(1.0)	2.2(1.0)	11.936	0.0001
	対象の個性性を考慮した看護計画の立案	4.6(0.9)	2.5(1.0)	13.043	0.0001
援助の 実施評価	対象と適切なコミュニケーションを図り問題を共有 と、目標に向けて取り組むこと	4.4(0.9)	4.5(0.6)	-1.171	n. s.
	対象のセルフケア能力を発見引き出し回復過程に活 かす援助	4.3(0.9)	4.5(0.8)	-1.274	n. s.
	対象が病気を受け入れ、生活しながら療養への援助	4.5(0.9)	4.4(0.7)	.165	n. s.
	対象の状況に応じて援助を評価・修正	4.5(0.9)	4.4(0.6)	-.767	n. s.
チーム アプローチ	対象が利用できる社会資源について	4.5(0.9)	4.6(0.6)	-.668	n. s.
	継続看護の必要性の理解	4.3(0.9)	4.4(0.7)	-.622	n. s.
	保健医療福祉チームの一員として看護師の役割	4.4(1.0)	4.7(0.5)	-2.197	0.030
	関連領域との連携について	4.4(0.9)	4.6(0.6)	-1.282	n. s.
役割 ・ 義務	問題意識を持って学習に取り組み方	4.4(0.9)	4.6(0.6)	-1.372	n. s.
	学生として礼儀・節度・責任ある行動	4.3(1.0)	4.4(0.7)	-.575	n. s.
	対象を尊重し、対象と適切な人間関係が形成	4.4(1.0)	4.5(0.7)	-.949	n. s.
	自己の健康管理	4.5(0.9)	4.6(0.8)	-.716	n. s.

\* 平均値および ( ) 内は標準偏差値

\* t 検定 (両側)、n. s.=not significant

修正できる」が実習前4.5(±0.9) 実習後4.4(±0.6) で実習後の変化は認められなかった。学生の役割・義務については4項目全てにおいて実習前後に差はなかった。また、チームアプローチに関しては「保健医療チームの一員としての看護師の役割」についてののみ有意差 (p<0.05) がみられた。

### 3. コンピテンシー 37項目について

「獲得能力」の評価は実習前3.6 (±0.6)、実習後3.5 (±0.7) で「必要能力」は実習前3.6 (±0.8)、実習後3.1 (±0.9) であった (表4)。

コンピテンシーの37項目を知識・技術・能力の3項目に分け、「獲得能力」と「必要能力」が実習前後で、どの様に変化したかを比較したところ

「獲得能力」の「知識」に関する質問は、実習前3.2 (±0.3)、実習後3.0 (±0.6)、「技術」は、実習前3.8 (±0.4)、実習後3.9 (±0.4)、「能力」は実習前3.8 (±0.4)、実習後3.4 (±0.4) であった。

「必要能力」の「知識」に関する質問は、実習前3.5 (±0.5)、実習後3.1 (±0.5) 「技術」は実習前3.6 (±0.5)、実習後3.4 (±0.6)、「能力」は実習前3.8 (±0.6)、実習後3.4 (±0.6) であった。実習前後の比較結果、獲得能力の技術および必要能力の知識、能力でp<0.001で有意差が見られた (表5)。

37項目の「獲得能力」と「必要能力」それぞれの上位項目を実習前後別に表6,7に示した。「獲得能力」の上位項目は、「誠実さ」「批判的能力」

「言語的コミュニケーション能力」であった。「必要能力」の上位項目は「リーダーシップ」「意思決定能力」「書きことばによるコミュニケーション能力」であった（表6-8）。

表4 コンピテンシー（知識・技術・能力）の結果

	項目		獲得能力			必要能力		
			実習前 (n=75)	実習後 (n=72)	t 検定	実習前 (n=75)	実習後 (n=72)	t 検定
知識	1	幅広い知識・教養	1.2(0.4)	3.4(0.7)	***	3.8(0.8)	3.3(1.0)	***
	2	学際的な知識や考え方	3.7(0.5)	3.3(0.7)	***	3.5(0.7)	2.2(1.0)	***
	3	特定の分野に関する理論的知識	3.6(0.5)	2.7(0.9)	***	3.2(0.6)	2.3(0.9)	***
	4	特定の分野に必要な方法論や分析技法の知識	3.2(0.7)	3.0(1.0)	n.s.	3.3(0.5)	2.1(0.9)	***
	5	外国語の能力	3.5(0.7)	2.7(0.9)	***	3.4(0.7)	2.3(0.9)	***
	6	コンピュータを扱うスキル	3.1(0.8)	3.0(0.8)	n.s.	3.7(0.7)	2.5(0.9)	***
	7	仕事の立案、調整、組織化の能力 仕事の立案・調整・組織化する力	2.9(0.7)	3.2(0.9)	n.s.	3.5(0.8)	1.9(1.0)	***
	8	コスト感覚をもって物事に対処する能力	3.6(0.5)	3.1(0.8)	***	3.6(0.7)	4.4(0.6)	***
	9	複雑な社会、調整、組織化の能力 複雑な社会・調整・組織化の能力	3.5(0.6)	3.3(0.8)	*	3.8(0.8)	4.3(0.8)	***
	10	規則を現実の場面で柔軟に運用する能力 規則を現実の場面で柔軟に運用する能力	3.7(0.5)	2.3(1.1)	***	3.4(0.8)	4.5(0.7)	***
	11	情報やアイデアを収集し整理する能力	2.6(0.8)	3.4(0.8)	***	3.5(0.8)	4.4(0.6)	***
	12	法律の知識（倫理的な面を含む）	3.6(0.6)	3.2(0.9)	***	3.3(0.8)	3.2(1.1)	n.s.
技術	13	問題の解決能力	3.6(0.6)	4.0(0.6)	***	3.3(0.9)	4.2(0.8)	***
	14	分析能力	3.9(0.5)	4.0(0.5)	n.s.	3.4(0.7)	4.4(0.7)	***
	15	学習能力	4.0(0.5)	3.9(0.5)	n.s.	3.5(0.9)	4.2(0.9)	***
	16	自分の仕事を客観的に評価する能力	3.9(0.5)	3.9(0.5)	n.s.	3.4(0.7)	4.1(0.9)	***
	17	創造性	3.8(0.5)	4.0(0.6)	*	3.6(0.8)	4.4(0.8)	***
	18	プレッシャーの下でも仕事ができる精神力	3.8(0.5)	3.9(0.7)	n.s.	3.7(0.9)	4.4(0.9)	***
	19	綿密性・細部に目配りする能力	3.8(0.6)	3.9(0.7)	n.s.	3.6(0.7)	4.2(0.8)	***
	20	時間を管理できる力量	3.8(0.6)	3.9(0.6)	n.s.	3.7(0.8)	2.5(0.9)	***
	21	交渉能力・折衝能力	3.8(0.6)	4.2(0.7)	***	3.7(0.7)	2.5(0.9)	***
	22	仕事への心構えや十分な体力	4.0(0.7)	3.9(0.7)	n.s.	3.5(0.8)	2.6(1.1)	***
	23	からだや手先を使う技能	3.8(0.6)	3.9(0.6)	n.s.	3.6(0.8)	2.4(1.0)	***
	24	独力で仕事できる能力	3.7(0.6)	3.9(0.5)	*	3.6(0.9)	2.4(1.0)	***
	25	チームの中で仕事を遂行する能力	3.7(0.6)	3.5(0.6)	*	3.5(0.7)	2.3(1.2)	***
能力	26	自発性・自主性	3.4(0.7)	4.2(0.7)	***	3.4(0.8)	2.3(0.9)	***
	27	融通性・順応性・適応能力	3.8(0.7)	4.1(0.7)	**	3.6(0.8)	2.2(0.9)	***
	28	自分の意見をはっきりと主張すること	3.9(0.6)	3.9(0.7)	n.s.	3.5(0.8)	2.3(1.0)	***
	29	集中力	3.7(0.6)	4.3(0.7)	***	3.7(0.9)	3.1(1.0)	**
	30	誠実さ	4.4(0.7)	4.7(0.5)	**	3.3(0.8)	3.0(1.2)	n.s.
	31	物事を批判的に吟味・検討する能力	4.5(0.6)	4.7(0.5)	n.s.	3.3(0.8)	2.4(1.0)	***
	32	話しことばによるコミュニケーション能力	4.4(0.6)	4.6(0.7)	n.s.	3.7(0.7)	2.8(1.0)	***
	33	書きことばによるコミュニケーション能力	3.8(0.6)	2.5(0.9)	***	4.4(0.9)	4.6(0.6)	n.s.
	34	他の考えを理解し、受容する力量	3.6(0.7)	2.1(0.9)	***	4.3(0.9)	4.6(0.6)	*
	35	リーダーシップを発揮する力量	3.6(0.7)	2.1(0.8)	***	4.4(0.9)	4.6(0.6)	n.s.
	36	自分の責任で決定を下す力量	3.6(0.8)	1.9(0.9)	***	4.4(0.9)	4.5(0.7)	n.s.
	37	これからの物事を予測できる能力	2.7(0.8)	1.5(0.8)	***	3.5(1.0)	4.4(0.8)	***

\* 平均値および（ ）内は標準偏差

\* \*\*\* $p < 0.001$ , \*\* $p < 0.01$ ,  $p < 0.05$ , n.s.=not significant, t 検定（両側）

表5 実習前・後の知識・技術・能力の比較

		実習前	実習後	t 値	有意確立
獲得能力	知識	3.2 (0.3)	3.0 (0.6)	1.982	n. s.
	技術	3.8 (0.4)	3.9 (0.4)	-1.253	n. s.
	能力	3.8 (0.4)	3.4 (0.4)	6.099	0.0001
必要能力	知識	3.5 (0.5)	3.1 (0.5)	5.268	0.0001
	技術	3.6 (0.5)	3.4 (0.6)	1.475	n. s.
	能力	3.8 (0.6)	3.4 (0.6)	3.956	0.0001

\* 平均値および ( ) 内は標準偏差値

\* t 検定 (両側)、n. s.=not significant

表6 獲得能力の実習前・後別の上位5項目

順位	実習前	平均値	実習後	平均値
1	批判的能力	4.5(0.6)	誠実さ	4.7(0.5)
2	言語的コミュニケーション能力	4.4(0.6)	批判的能力	4.7(0.5)
3	誠実さ	4.4(0.7)	言語的コミュニケーション能力	4.6(0.7)
4	学習能力	4.0(0.5)	集中力	4.3(0.7)
5	仕事への心がまえ	4.0(0.7)	自発性・自主性	4.2(0.7)
	平均	3.6(0.6)	平均	3.5(0.7)

\* 平均値および ( ) 内は標準偏差値

表7 必要能力の実習前・後別の上位5項目

順位	実習前	平均値	実習後	平均値
1	リーダーシップ	4.4(0.9)	自分とは異なる考えを理解し、受容し集める力量	4.6(0.6)
2	意思決定能力	4.4(0.9)	リーダーシップ	4.6(0.6)
3	書きことばによるコミュニケーション能力	4.4(0.9)	書きことばによるコミュニケーション能力	4.6(0.7)
4	自分とは異なる考えを理解し、受容し集める力量	4.3(0.9)	意思決定能力	4.5(0.7)
5	幅広い一般的知識	3.8(0.8)	規則を現実の場面で柔軟に運用する能力	4.5(0.7)
	平均	3.6(0.8)	平均	3.1(0.9)

\* 平均値および ( ) 内は標準偏差値

表8 必要能力の実習前・後別の下位項目

実習前	平均値	実習後	平均値
問題解決の能力	3.3(0.9)	自分の意見をはっきりと主張すること	2.3(1.0)
ものごとを批判的に吟味・検討する能力	3.3(0.8)	領域を超えた知識や考え方の活用	2.2(1.0)
誠実さ	3.3(0.8)	融通性・順応性・適応能力	2.2(0.9)
特定の分野で必要な方法論や分析方法の知識	3.3(0.5)	特定の分野で必要な方法論や分析方法の知識	2.1(0.9)
特定の分野の理論的知識	3.2(0.6)	仕事の立案・調整・組織化のする能力	1.9(1.0)
平均	3.6(0.7)	平均	3.1(0.9)

\* 平均値および ( ) 内は標準偏差値

## V. 考 察

### 1. 不安・負担感について

実習前後で負の有意差があり、実習後に不安・負担感の平均値が上昇した項目は2項目だった。

学生は実習で対象者に起こっていることを観察し、看護を展開し、自己学習で得た知識を実践して深める。学生の判断能力と主体性を伸ばすためには学生自身が気になり困った出来事の意味を考え解決方法を探求する必要がある<sup>8)</sup>。学生は実習によって、既習の知識を実践に応用し、看護援助を通して自己学習の不足に気づくが、記録物が書けず「記録物の負担」につながったと考えられる。また、学生は文章表現に慣れていないことが「記録の負担」に影響していると考えられる。記録への理解を手助けする記録方式や演習内容について考える必要がある。臨床実習は新たな経験の連続であり、意識的に自らの経験を振り返り、気づきを得ることのできる能力が不可欠となる<sup>9)</sup>。実習の中で学生自身が新たな知識の必要性を知り、学習の不足や記録で表現することに気づけるように、自分で足りない能力を獲得できるよう実習教員はサポートする必要がある。

### 2. 看護過程展開について

学生は「対象の健康状態や身体・心理・社会的・健康障害の特徴」について理解が低いととらえている。情報収集はできて、情報の整理・分析が困難だった<sup>10)</sup>ことが推察され学生は対象者を理解しきれいまま看護過程を展開し、援助を行う中で対象者の理解が不足していることに気づくと言えらる。

看護計画の立案では、実習後の平均値が低かった。学生にとって、成人看護学実習の看護過程の難しさは、看護計画の立案と評価・修正の仕方と書き方にある<sup>11)</sup>。学生は看護計画の立案が困難な上に、対象者の統合的理解が不足しているため、看護計画の立案につながらなかったのではないかと。そのため、実習後の記録物への負担感に影響

したと考える。

対象の理解、看護計画の立案で高い有意差が出ている。これは実習を通して、既存の知識不足に気づくことができる一方で、経験から獲得する新たな知識を統合し表現することに困難さを感じているといえる。また、学生は自分が実習で行っている内容の意味を理解していないことが伺える。看護は何らかの疾病や障害を抱えた人間的状況を身体的に感知し、その人のニーズを捉え、その人の「生活の質」の向上のために身体で関わる「相互主体的かつ相互行為的」な営みである<sup>12)</sup>。学生は実習で対象者と関わり、一日の行動を振り返る中で、対象者の理解が不足している点に気づけたか、新たに得た情報を考え整理・分析し次の看護につなげているかを実習教員は記録や発言からとらえる必要がある。また、実習中に経験したことを既習の知識と照らし合わせ、表現できるようにサポートする。そして、学生が行動を具体的に記録や発言で表すことで、翌日の自分の看護が明らかになり看護過程に繋がることを実習の中で学生に伝えていく必要がある。

### 3. コンピテンシー 37項目に関して

獲得能力に関しては、すべてにおいて実習後低下している。これは、他の看護系大学で実施した際に同様の結果が得られている<sup>13)</sup>。ベナーは、「初心者レベルは、その状況に適切な対応をするための実践経験がない。臨床状況に身を置いて技術の向上に欠かせない経験を積むためには、彼らはまず客観的屬性から状況を学ぶ。(中略) また、異なる属性に対応できるように、状況の前後関係を必要としない原則を学ぶ。新人レベルは、繰り返し生じるような状況に気づく(あるいは指導者に指摘されて気づく)ことができる程度に状況を体験したレベルである。」<sup>14)</sup>と述べている。臨地実習で学生は多種多様な経験をし、能力を獲得している。たとえば、「からだや手先を使う仕事の技能」に関する実習前後での獲得能力を比較すると、わずかではあるが上昇していることから、ベナー

のいう教科書レベルの初心者レベルから新人レベルに近づきつつあるといえるであろう。

必要能力の技術項目が著しく低下していることは、臨地実習前に「臨床では種々の技術が必要である」と考えていた学生が実際に臨地実習を経験すると、技術面だけでなく、知識や能力面の充実も必要であることを理解したためと考える。

必要能力の項目で実習後に低くなっているその他の内容は「領域を超えた知識や考え方の活用」「融通性・順応性・適応能力」「特定の分野で必要な方法論や分析方法の知識」「仕事の立案・調整・組織化のする能力」であった。これらは、かならずしも学生時代に習得が必要な項目ではないが、臨地実習は念頭に置きながら指導する必要があると思われる。

## VI. まとめ

新設看護系大学の学生が臨地実習における「不安」、「看護過程展開に関して」および「コンピテンシー」(知識・技術・能力)の自己評価を調査した。

1. 「不安」は実習前よりも実習後に不安や実習中の記録物への負担を感じていた。
2. 「看護過程展開に関して」では対象の理解については「対象の発達段階と発達課題を理解できる」以外の項目が、実習後に有意に低下した。また、看護計画の立案の4項目すべてにおいて実習後の平均値は3未満と低くなった。
3. 「コンピテンシー」は獲得能力の上位項目は、「誠実さ、批判的能力、言語的コミュニケーション」、要求能力の上位項目は、「自分とは異なる考えを理解し受容する力量、リーダーシップ、書言葉によるコミュニケーション」であり、ともに実習前よりも実習後において要求度の平均点は上昇していた。

以上のことから、教員は学生自身が新たな知識や学習の必要性に気づけるように関わり、学生が記録や発言で考えを明確にすることで看護過程に繋がることを実習の中で伝えていく必要がある。

## VII. 研究の限界

今回の研究では1大学の1回生のみの調査のため、内容に偏りがあると考えられる。今後は多くの大学での調査も検討する必要がある。

## 謝 辞

本研究をまとめるにあたり、調査にご協力いただいた学生の皆様に感謝致します。

## 文 献

- 1) 文部科学省：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：最終報告，2011.
- 2) 宮島朝子：教育過程別看護教育カリキュラムの作成と運営：小山真理子編，看護教育のカリキュラム，53-74，東京，医学書院，2000.
- 3) 杉森みど里、舟島なおみ：第5章IV. 看護実習展開論，看護教育学：245-294，東京，医学書院，2004.
- 4) 小方直幸：コンピテンシーは大学教育を変えるか，高等教育研究紀要第4集「大学・知識・市場」，：71-91，2001.
- 5) 立石和子：大卒看護師に必要な能力の初期キャリア形成過程に関する研究，平成17-19年度文部科学省研究費補助金（基盤研究C）（最終成果報告書）：p16，2008.
- 6) 海老原嗣生：コンピテンシーとは何だったのか，Works 57：4-47，2003.
- 7) 吉本圭一：第1章 調査結果の概要，吉本圭一編，日欧の大学と職業—高等教育と職業に関する12ヶ国比較調査結果—，335-368，東京，日本労働研究機構，2001.
- 8) 藤岡完治，安酸史子，村島さい子，中津川順子：学生とともに創る臨床実習指導ワークブック（第2版），8-42，東京，医学書院，2001.
- 9) 安酸史子：学生とともにつくる臨地実習教育 経験型実習教育の考え方と実際，看護教



- 育41 (10) : 814-825, 2000.
- 10) 池田智子：成人看護学実習Ⅱにおける学生の看護過程に対する困難と学び—実習終了後のアンケートから—。神奈川県立よこはま看護専門学校紀要6 : 11-13, 2010.
  - 11) 三枝香代子, 浅井美千代, 長井栄子, 小池暖子, 梅津千香子, 白鳥孝子：成人看護学実習での看護過程展開において学生が体験する困難—実習終了後のアンケート調査を基に—。日本看護学会論文集38 : 114-116, 2008.
  - 12) 藤岡完治, 安酸史子, 村島さい子, 中津川順子：学生とともに創る臨床実習指導ワークブック(第2版)。44-70, 東京, 医学書院, 2001.
  - 13) 立石和子, 吉本圭一：看護系大学生の職業的な能力(Competence)の自己評価—臨地実習前・後および就職後初期における比較検討—。九州看護福祉大学紀要8 (1) : 69-81, 2006.
  - 14) Patricia Benner : From Novice to Expert Excellence and Power in Clinical Nursing Practice. 2005. 井部俊子監訳：ベナー看護論新訳版 初心者から達人へ。11-32, 医学書院, 2005.

A study on changes in students' perceptions before and after adult practical nursing training focusing on “anxiety,” “development of the nursing process,” and “competency”

NAKAZAWA Youko, TATEISHI Kazuko, HARAYA Tamami and SASAKI Masako

**Abstract:** With the aim of studying effective on-site laboratory work, a self-evaluation-based questionnaire survey on “anxiety,” “development of the nursing process,” and “competency” during practical laboratory training (practical training, below) was conducted on 78 third year students at a new nursing university. Compared with before training, the students experienced increased anxiety after practical training; moreover, they experienced stress with regard to the maintenance of records during training. We discovered that difficulty was experienced in drawing up a nursing care plan because of insufficient subject understanding. Furthermore, throughout practical training, we noticed a need to improve written communication, reliability and critical skills, linguistic skills, ability to understand and accept ideas different from one's own, and leadership. The teaching staff participating in practical training needs to be aware of students' need for new knowledge and training.